



木下恵介記念館 No.16 2015.12.1 発行

# 栄町だより

Keisuke Kinoshita Memorial Museum

公益財団法人 浜松市文化振興財団  
発行：木下恵介記念館  
〒432-8025 浜松市中区栄町3番地の1  
TEL&FAX 053-457-3450  
E-mail : kinoshitakan@hcf.or.jp  
http://www.hcf.or.jp

## 新着資料紹介

### 松竹木下恵介監督作品『この天の虹』八幡ロケ記念アルバム

#### 1 資料説明

この記念アルバムは、中本哲也氏より当記念館に寄贈されたものである。1958(昭和33)年10月28日公開の木下恵介監督作品『この天の虹』の八幡ロケを記念し松竹株式会社で作成したもので、八幡製鉄所での撮影時のスナップと映画スチールが貼られているが、説明書はない。

この映画の撮影は、当時東洋一と言われた北九州市の八幡製鉄所(現:新日鉄住金)で、会社側の全面協力を得て行われており、撮影に協力した会社(八幡製鉄所)または限られた個人に贈られたものと思われる。松竹大谷図書館によれば、ここまで丁寧な撮影記念アルバムを松竹が作ることは極めて珍しいとのこと。

寄贈者の中本氏によれば、この記念アルバムは父親の遺品整理中に発見したもので、入手の経緯については全くわからないという。ただ、父親は映画撮影当時に八幡製鉄所に勤務し、この映画公開と同月に中本哲也氏が生まれていることから、記念のために直接あるいは間接的に入手し、長らく保管していたものと推測される。

#### 2 資料内容

- ①表紙 縦 33cm×横 28cm  
紺フェルト地 厚装丁 左二箇所紐綴 左上松竹社章金地
- ②中表紙 上段『この天の虹 松竹木下恵介監督作品』  
下段『八幡ロケ記念アルバム 1958.10 完成』
- ③写真 モノクロキャビネ版 59点(内訳 撮影スナップ 19点 映画スチール 40点)
- ④スタジオだより OFUNA TIMES NO103~3 1枚  
松竹大船撮影所宣傳課 昭和33年9月20日発行 TOTAL NO177  
B4版三色刷 映画『この天の虹』広報用チラシ



①表紙



②中表紙



③写真



④スタジオだより

#### 木下監督作品『この天の虹』 松竹大船作品 1958.10.28 公開 カラー シネマスコープ

日本が高度経済成長に向かう時代を代表する北九州の八幡製鉄所を舞台に、さまざまな職種に従事する社員の暮らしと恋愛を描いた作品である。

木下監督は、資本家も労働者も同じ人間であり、人間の幸福とは何かという根源的なテーマにも迫ろうと、八幡製鉄所の敷地に社員住宅、プールやスーパーマーケットと充実した福利厚生施設と自社のオーケストラ演奏会、水上カーニバルショーなど、社内行事の様子もドラマの背景として取り入れ、巨大な工場と機械に疎外され虐げながらも、懸命に働く人々の姿を描き出している。

川津祐介と小坂一也の新人デビュー作でもある。



©松竹 1958

# 上映作品の余韻

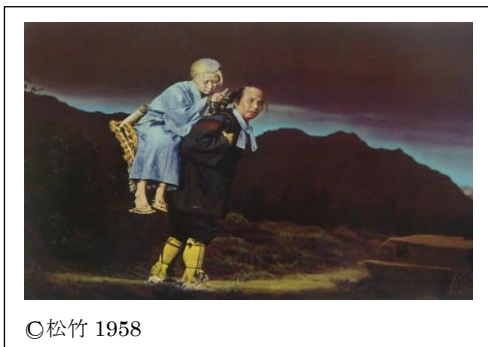
1948年公開作品『女』  
1958年公開作品『楢山節考』

〈館長 原田昌典〉

『女』 登場人物を強盗犯の男と情婦の女に限定し、二人の心理の変化を細かく描いているが、驚いたのは男女の性愛の表現場面だ。新聞沙汰となる悪事を犯したことを知り、今度こそ別れようと決めた女の気持ちが大きく変わっていく場面。真鶴駅で別れる約束をした二人。駅まで乗せてもらったトラックの荷台に横になりながら、女の手袋を男が脱がせて手に唇を近づけたり、女の胸を触ったり、女が足を開いたり、トラックがトンネルを抜ける度に男への愛着が増していく。最後のトンネルを抜けたところで女のにっこりする顔。トンネルの暗転と抜けるごとに変わる女の表情の変化が実に印象的である。これに続くシーンは熱海の旅館から出てくる二人へと移る。演歌師たちの歌につられて気持ちよさそうに歌う男の顔。女は完全に自分のものになったという心の内が読み取れる。他にも女の足のアップや靴下を履きかえるシーンなどもあり、木下監督にとっては破格とも思われる描き方である。



©松竹 1948



©松竹 1958

『楢山節考』 姥捨てをリアルに映像化せず、歌舞伎という洗練された日本の伝統様式を使い、扱うテーマの生臭さを感じさせない。シネマスコープサイズの横長の画面もまさに歌舞伎の舞台そのもの。楢山参りの作法を経験者から聞く場面では、情景や心理の描写を浄瑠璃や長唄の音楽と歌を効果的に使い歌舞伎の作法に習い登場人物の役割と性格を際立たせている。引き割りや落とし幕での場面転換、色照明、スポットライトなどにも歌舞伎の舞台技術を巧みに生かしている。ラストの楢山参りの場面。母おりんを背負って山へ登りそこでの無言の別れ。彼の世を思わせる美しい二人の動き。山を

駆け下りる辰平の動きと感情に合わせた音楽の素晴らしい迫力や雪の降り積もり方など、実に細やかな演出である。ただ、ラストの白黒撮影での汽車と嫡捨駅のシーンには賛否両論あるようだ。



## 12月～2月のイベント案内

12月～2月の館内月例上映会では、次の木下監督作品を上映します。

また、12月5日(土)には、木下監督生誕記念日特別企画として木下監督の愛弟子川頭義郎監督『涙』の上映会を、2月14日(日)には、原節子追悼特別企画として木下監督作品唯一の原節子出演作『お嬢さん乾杯』の上映会を予定しています。

※詳しくは当記念館イベント案内をご覧ください。

**12/20(日) カルメン純情す**

上映 10:00～・14:00～



©1952 松竹

1年間の欧州旅行を経ての帰国第一作。戦後の日本の現状を批判的な視点から描いた風刺喜劇。カメラアングルや音楽・衣装に洋行後の木下監督の新たなアイデアが見られる。

**1/17(日) 破れ太鼓**

上映 10:00～・14:00～



©1949 松竹

時代劇の大スター阪東妻三郎や実弟の木下忠司が出演。当初予定の高峰秀子に代わりに小林トシ子が大抜擢。田村高廣と木下監督が出会うきっかけとなった作品。

**2/21(日) 不死鳥**

上映 10:00～・14:00～



©1947 松竹

佐田啓二のデビュー作。当初田中絹代と上原謙のコンビで企画されたが、接吻シーンを上原が躊躇したため、入社のため撮影所に居合わせた佐田啓二を大抜擢した。